

---

# 転生させたい僕と転生してくれない君

突貫作業人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

転生させたい僕と転生してくれない君

### 【Nコード】

N1182M

### 【作者名】

突貫作業人

### 【あらすじ】

僕は誰かって？ 神ってやつ。

間違っつて君を殺しちゃったんだよねー。

漫画やアニメの世界に転生させるから、それで許してくれない？

チート能力もつけるからさ。

……え？ダメ？マジで？

これを逃したらこんなチャンス一生こないよ？

……早く元の世界に帰せだつて？

あの、お願いだから転生してください……

## プロローグ（前書き）

様々な二次元キャラを転生させたい神様（主人公）。

しかしひとクセもふたクセもある彼らは転生しようとしな

い。そんな彼らに転生してくれと頼みこむお話です。

分量は私の他の小説と違って少ないので、さくっと読めると思いま  
す。

## プロローグ

### プロローグ

僕は神だ。

出オチじゃないぞ。

正真正銘の神なんだ。

確かに他の神に比べて能力も階梯も低いけど、それでも神だ。

でも神って案外暇なんだよねえ。

神にとって最大の敵は退屈だって言う神もいるくらいだし。

で、基本的に僕たちはやることなくて怠惰を重ねているんだけど、最近はそのじゃないんだ。

何故かって？

暇を潰す面白い方法を見つけたからさ。

神界にブームを巻き起こしてると言っても過言じゃない。

早くそれを教えろって？

ふふ、いいだろう。

それは僕らの間でこう呼ばれている。

「異世界転生」。

知っているかもしれないが、簡単に説明しよう。

まず人間界で適当な人間を見つける。

ここでポイントなのが「ゲームやアニメ、マンガが好き」な人間を狙うことだ。

次にどんな方法でもいいから取り敢えず選んだ人間を殺す状況をつくる。

例えば「車に轢かれそうになった人を助けて代わりに死んだ」とかが定番だ。

そしてすぐさま死んだ人間の魂魄を捕まえてくる。

早くしないと然るべき機関の手によって成仏しちゃうからね。

これがなかなか難しい。

その人間が死んだという事実を隠しておく必要があるんだ。

人間界でいうと、書類を改ざんするようなものかな。

とにかく、何事もなかったかのように死んだ人間を連れてくる。

そしてその人間が目を醒ましたら交渉スタートだ。

僕たちはまず最初に手違いで殺してしまったことを告げる。

この時、軽いノリでせまるのが最近の流行らしい。

「あー、ゴメンゴメン。つい間違っただけで殺しちゃった」

という感じである。

普通ならここで人間は激怒するところなのだが、最近は何故かあまり怒らない傾向だ。

黙って話を聞いてくれる人が多いらしい。

ここからが本番だ。

僕たちは人間に一つの申し出をする。

「お詫びにファンタジーな世界に転生させるよ」

と言っのが定石だ。

このファンタジーな世界、というのは別に決まっていらない。

人間が望むのなら、マンガやアニメの世界に転生させることもできる。

俗に言うオリエント転生ものだ。

忘れてはならないのがこの次。

たたみかけるようにして

「もちろん君の好きな能力もつける。3つまでいいよ」

と言う。

これで完璧だ。

人間たちは大抵あまり深く能力について考えない。

常日頃から、欲しいと思っている力があるからだ。

空を飛べる能力とかよりも、最強になれる力の方が遥かに人気が高い。

その姿を見ながら、僕たちは内心で

(また、「ぼくのかんがえたさいきょうのうりょく」か)

とか

(厨二病乙)

と嘲り笑うのだ。

まあそれは置いておくとして、きちんと考える人間もいるらしいが、それでも最後は能力を決めて異世界へと旅立っていく。

どうして彼らはこの境遇を不思議に思わないのか？

それは神界七不思議のひとつに数えられている。

ちなみに神界七不思議というのは……ごめん、話が逸れたね。

とにかく人間は異世界にたどり着く。

そこでの第二の人生は、例え万能の力をもっていたとしても波乱万丈の日々であることは間違いないだろう。

もしかしたら優しいお姫様に出会えるかもしれない。

もしかしたらいきなりモンスターと戦うかもしれない。

もしかしたら平凡な生活を過ごすことになるかもしれない。

もしかしたら……。

例え同じ条件で同じ異世界に行った人間がいたとしても、IFは無数に存在し、人間たちの日々も無限に枝分かれする。

まったく予測のつかない、ひどく陳腐で誰もが望む御伽噺がそこにはあるんだ。

何度も繰り返すが僕たちは神だ。

決して人間の叡智が届くことのない遥か高みに僕らはいらんだ。

普段の人間は運命……予定調和の上で生きている。

その枠組みから抜け出さない限り、誰の人生だって僕たちは彼らが産声を上げた時点から全て分かる。

かけがえのない人生が結末に向け収束していく様を見ることができるとだ。

だけど初めから結果の分かっているものを見ていて楽しいかい？

推理小説の顛末を事細かに話された後で、一ページ目を開くようなものだ。

だから僕たちは余程のことがないと、人間の人生をわざわざ見たりしない。

でも、転生後の人生は違う。

運命という楔から解き放つことにより、人生というシナリオは白紙にかえるんだ。

それは例え、神でも予想できない。

唯一無二の物語。

僕たちはそれを求めて人間たちを転生させるんだ。

以上で説明は終わりだけど、理解できたかい？

少し話が長くなったから分かりにくかったかもね。

つまり要約すると、

「人間に力を与え、別の世界に転生させ、そこでの生活を観て楽しむ」

ということだ。

それはさしずめ全知の神が楽しめる究極の物語。

これでなぜ人間を「異世界転生」させることが神界でブームなのか分かったね？

実はこれから僕も一人の人間を選んで転生させてみようと思う。

転生させるのは初めてだからドキドキするな。

流行に乗り遅れてた僕だけど、マニュアルも熟読したし大丈夫だ。

これで他の神にも僕が親となる物語を自慢できるぞ。

あ、そうそう。

最後に僕の名前だけど、ネモウって呼ばれてる。

またいつか会うことがあるかもしれないから、憶えてくれると嬉しーよ。

## プロローグ（後書き）

なんだか転生ものの批判みたいになっていますが、作者は転生もの大好きです。

チートも大好物です。

といいますか、私の他の小説は最強ものだったりする……

次回は第一話ということなので、二次元キャラではなく作者自身がターゲットになります。お楽しみに！

**A p p r o a c h : 1 突貫作業人（作者）（前書き）**

一人目なのでチュートリアル的な意味合いでターゲットは作者自身です。とはいっても作中に登場する突貫作業人と私とは大なり小なり差異があります。あまり気にしないでくださいね。

Approach : 1 突貫作業人（作者）

Approach : 1 突貫作業人（作者）

僕は人間界を見ていた。

どうやってかって？

なんの道具も装置も必要ない。

ただ見たいと思えば神の眼が見せてくれるんだ。

グー・オルア・オスの百倍は解像度がいいね。

僕は取り敢えずオタク大国である日本を見ていた。

この国はマンガやアニメが好きな人間がそこかしこにいる。

一番大切な書物は聖書や仏典じゃなくて漫画だという人が大勢いるんだ。

これだけいれば選ぶ人間に困ることはない。

僕は閑静な住宅街を歩く一人の男に目をつけた。

転生させる人間の最適な年齢は高校生くらいだと先神たちは語っている。

男はまだ若い。

幼さが残っている。

少年と青年の狭間といった顔立ちをしていた。

十六〜十八歳といったところだろう。

つまりベストだ。

僕は彼のプロフィールを調べる。

名前……突貫作業人！？

なんだあのふざけたヤツは？

よく調べると、それはペンネームだったらしい。

ペンネームだとしてもふざけているが。

本名については禁則事項となっていた。

低級とはいえ神である僕に名前を提示させないあの人間は何者なんだ？

……まあ、どうでもいいか。

オタクであることに間違いはないので彼を記念すべきターゲット  
第一号に決めた。

僕は早速殺しの計画をたてる。

突貫作業人（以下、突貫にしよう）が歩く先には大きな交差点があった。

五叉路で、交通量が多い。

事故を起こすには絶交のポイントだ。

……なんだかこうしていると死神みたいだな。

ちょうど交差点の歩道では、一組の親子が信号を待っていた。

まだ若い両親の間で手を繋ぎながら可愛らしい幼女が笑っている。

三人家族だろうか？

最近は核家族化が進んで問題になっているからなあ。

もっと祖父母と住むべきだと思う。

様々な点においてそれがお互いのためになると何故分からないのだろう。

いや、分かっているても今の日本がそれを困難にしているのか。

本当に世知辛い世の中だ。

……おっと、人間の事情はどうでもいい。

今はあの男を殺すことに全力をそそごう。

突貫は招かれるようにして親子の隣に並ぶ。

ククク……いいぞ、そのままだ。

信号の切り替わりまでの時間を伝えるバーが下がっていく。

横断可能の音が止み、やがて信号が青に変わった。

「おとーさん、おかーさん、はやく、はやくう！」

僕の見えざる手が幼女を突き動かす。

両親の手を払って横断歩道に飛び出す幼女。

先ほどまでとは違うメロディーの中で、父親が叫んだ。

「奏ーっ！！」

幼女はようやく身にせまる圧倒的な脅威に気付く。

唸りを上げて走る大型トラック。

減速する気配はない。

酒気を帯びているドライバーは視界に光る信号が赤をさしていることに気がつかなかった。

幼女は瞳を大きく見開く。

母親がヒステリックに叫ぶ。

父親が重い荷物を放り出して走り出す。

間に合わない。

僕は微笑んだ。

「おおおおおおっ！！！」

猛スピードで道路に飛び出す影があった。

突貫だ。

ヘッドスライディングの要領で立ちつくす幼女を突き飛ばす。

幼女の軽い体は宙に浮き、向かい側の歩道までとどいた。

擦り傷ができたかもしれない。

打撲したかもしれない。

それでも死ななかった。

一人の男の勇氣ある行動のおかげで。

最期の瞬間、突貫が何を考えていたのか僕は知ろうとしなかった。

ただ、少しだけ罪悪感が生まれた気がした。

「じじは……どっだ」

彼の死後、僕は迅速に行動した。

その甲斐あって、僕の目の前には新鮮な突貫の魂魄があった。

「ここは死後の世界さ」

魂魄とはいってもちゃんと人間の形をしている。

僕は彼に微笑みかけた。

「君は死んだんだ」

「え？ あ、あー、そういえば俺は車にはねられて死んだんだっけ」

「そのとおり。でさ、一つ謝りたいことがあるんだけど」

「謝りたいこと？ というかあなたは誰です？」

「僕は神。謝りたいことっていうのは、間違っつて君を殺しちゃったことかな」

途端、突貫の顔色が変わった。

「ふざけるっ！勘違いっつてことか！？そんなことで俺は死んじまっつたのか！」

「ご、ごめん。本当に悪かった。だからお詫びに君を転生させてあげよう」

「それが謝る態度か！人を死なせておいて『転生させてあげよう』だ！？上から目線も大概にしろ！」

憤りがびんびん伝わってくる。

怖い。

恐いです。

だがここで挫けちゃダメだ。

あの魔法の言葉を言うんだ！

「も、もちろん、能力も三つ与えるよ。どんなチート能力でもいいから言っつてごらん？」

「だったら今ここで神を倒す力をくれ！！」

うわああ、やっぱり無理だったよお。

こいつ、やばいよ。

イレギュラーだよ。

確かこういう状況に陥った場合、勇気を奮い立たせる名言がハウツー本に書いてあったはず。

あれは確か……

「イレギュラー要素は抹消する、私はそう判断した」

「神に反逆する…馬鹿げたことを」

「この世界にあなたは不要なのよ……消えなさい！イレギュラー！……」

……無理だよ！

ハウツー本は所詮ハウツー本。

予定外の事態には対応できないんだ！

僕が突貫の迫力に気圧されていると、突然突貫が膝をついた。

「畜生っ！ フラグが無駄になったじゃねえか……」

僕は耳を疑った。

「フラグ!？」

「あの女の子だよ。きっと俺のことを王子様と思ったに違いない」

うわぁ。

ドン引きですよ。

「命を賭けてフラグたてたのに……これじゃあ死にきれねえよ……」

背中を丸めてむせび泣く野郎が一名。

今、僕は声高らかに断言しよう。

変な奴を捕まえてしまった!!

なんなんだコイツは!

僕のパーフェクツな転生計画が完全崩壊する音が聞こえる。

……いや、まだだ、まだ終わらんよ!

必ずどこかに突破口が、打開策があるはずなんだ。

「突貫くん。僕の話聞いてくれ。君の話聞いていると、つまり君は女の子と付き合いたかったんだね？」

突貫は涙で濡れた顔をあげた。

「告白なら何度もされてる……だけど全部断ってるんだ。なんとなく付き合うのが怖くてさ」

衝撃的な返答に、僕の堪忍袋の緒がブチ切れた。

僕の嫉妬メーターの針は完全に振りきれている。

二回殺してやるっ。

神の力を解放しようとした時だった。

突貫がぼつりと呟いた。

「俺は……あの子を一目みた瞬間、恋に落ちたんだ。絶対に助けなきゃって思ったら体が動いてた」

僕は驚愕のあまり絶句した。

なんということだ。

ラブストーリーは突然に。

それは大変素晴らしいことだと思う。

ただし……

「あんな小さな子に欲情するな、このロリコンが！」

「俺は、ロリコンじゃない。好きになった女の子が、たまたまロリ

「だっただけだ!!」

「それをロリコンって言うんです!」

「一万歩譲ってロリコンだとしても、ペドフィリアじゃない!!」

「同じだろーが!!」

「微妙に違う! 辞書を引いてみる!!」

「知ったことか!」

「無意味な差別は争いを生むとなぜ分からない!」

「なんでそこで正論!?!」

この勢いのまま僕らは罵詈雑言を浴びせあい……いつしかお互いを理解していた。

僕は彼を殺した理由を説明し、今度は心から謝った。

「なあ」

真っ白な床に体を寝かせた突貫が言った。

「ん?」

「今度からさ、転生させたいときは人間を殺すなよ」

「できれば僕だって殺したくないさ。でもどうすればいいんだよ」

「二次元キャラにしる」

「え？」

「二次元キャラなら殺したって影響はない」

さらりと恐ろしいことを言う。

しかしそれは確かに名案かもしれない。

二次元キャラなら黙って従ってくれそうだし。

「うん、これからはそうするよ。それよりさ」

僕は何もない空間の一点を指差した。

そこに白いドアが現れる。

「現世に帰れるドアだ。あれをくぐれば君は生き返る。轢かれた事実は覆せないから程度の差こそあれ怪我はしているだろうけどね」

「俺は生き返るのか？ …… はは、こんなに嬉しいことはない……」

「あの子と……上手くいけよ」

「神様……」

「僕はネモウだ」

「そうか。ネモウ、約束する。俺は絶対彼女を幸せにするよ」

「ああ。頑張ってるね」

「ありがとう。さようなら」

そう言って突貫はドアの向こうに消えていった。

この場に残るのは僕だけになり、静寂が訪れる。

僕は突貫の未来に幸多きことを願いながら、

「ちつくしよおおおおおおおおおおおおおおおお  
おー!!」

色々な悔しさを発散するため吼えた。

僕の転生勧誘はまだ始まったばかりだ。

一回目を失敗する神はたくさんいる。

次、頑張ればいい。

そう。

次こそは、必ず転生させてやる！

僕は心に固く誓った。

**A p p r o a c h : 1**

**突貫作業人（作者）（後書き）**

やっぱりこれくらいの量だと早く書けますね。

次回はついに二次元キャラを転生させようと思います。

ターゲットのヒントは「ガンダムバカ」。

最初だから知名度のあるキャラじゃないとね。

感想をお待ちしています。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1182m/>

---

転生させたい僕と転生してくれない君

2010年10月10日02時07分発行